信州発 “ずく”出して、世界への はじめの一歩 イマ・ココから

国際協力

2021.4.1
春号
No.67
JICA駒ヶ根

JICA海外協力隊 コロナ禍の1年 ～帰国から現在までの活動～

新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大のため、JICA海外協力隊の全隊員が帰国してから、1年が経ちます。彼･彼女らは、突然の帰国をどのように受けとめ、何に取り組んできたのでしょうか。

今回の広報紙では、長野県にご縁のある隊員たちの思いや新たな挑戦をご紹介します。

桑原真菜実さん

長野市出身　2018年度1次隊　東ティモール派遣　栄養士

なぜ青年海外協力隊に参加されたのですか?

▶大学生の時に、アジア各国へ旅行した際に、さまざまな文化や人々に触れて途上国に興味を持ちました。その後、栄養士の資格取得途中だった大学4年時に協力隊を知り、卒業後に病院で勤務し、経験を積んだ後に協力隊に参加しました。

現地では、どのような活動をしていましたか?

▶派遣当初、東ティモールの保健省の栄養課に配属され、さまざまなデータ入力の補助や各イベントを手伝いました。その後、現場の栄養士さんや患者さんと1対1で接したいという想いが募り、国立病院の栄養課でも活動しました。そこでは病院内のリーフレットの手直しや、病院食のアンケートを取ったり、直接患者さんと話したりして、栄養改善に努めました。

新型コロナウイルス感染拡大で、帰国を余儀なくされた時はどのようなお気持ちでしたか？

▶帰国一週間前に首都で大洪水があり、隊員の家や職場が浸水してしまったので目の前の出来事に必死で、頭の中に「コロナ」や「帰国」はありませんでした。そのような中、JICA事務所から、突然「明後日の飛行機で日本に帰国します」と、連絡がありましたが、東ティモールでは当時ほとんど感染者も出ていなかったので、実感もなく、ただただ驚きました。空港まで来てくれた仲間に見送られながら「またすぐ帰ってこられるから…」と思いましたが、まさか帰れないとは考えていませんでした。

帰国されてから、どう過ごされていましたか?

▶色々な不安はありましたが、とにかく、日本でできることをしました。英語の勉強をしたりランニングなどで身体を動かしてリフレッシュしたり…あとは周りからのアドバイスで前向きになれたりしました。

7月に隊員の任期が終了となった後、東ティモールで栄養改善の事業を実施している日本のNGOに入り、東ティモールに戻ることができました。そこでは、学校給食の料理教室を開いたり、子どもたちに栄養日記を書いてもらったりして、そこから栄養不足となっているものが何か調査します。また、島でとれる魚やゴマを使った、栄養価が高いふりかけを作り、学校給食に取り入れてもらったりしています。こうしてまた、東ティモールに帰ってこられて、色々な人が温かく受入れてくれることが本当に幸せです。

今後の展望について

▶現在取り組んでいる事業は2022年で一旦終了します。その先は、まだ具体的なことは考えていませんが、1対1の人間関係の構築がとても魅力的な職業ですので、栄養士は今後も続けていきたいと思っています。さらに協力隊の経験で培った気付きや経験を、自分の特性として活かしていきたいです。

大橋歩美さん

川崎市出身　2018 年度 4 次隊　ネパール派遣　交通安全

なぜ青年海外協力隊に参加されたのですか?

▶警視庁に勤務して9年目、JICA海外協力隊に「交通安全」という職種での募集案件があることを知りました。交通課に勤めていた経験を開発途上国の人たちのために活かしたい、現地の人たちと直接関わりたいという思いが日に日に強くなっていきました。国は違っても、市民を守るという警察官の目的は同じです。日本で働く警察官と同じ気持ちで協力隊として市民のために活動しようと心に決めました。

現地では、どのような活動をしていましたか?

▶ネパールでは近年交通量が急激に増え、交通事故の増加が課題となっています。信号の運用が始まって間もないこともあり、信号を守る意識が住民に浸透していないように思いました。そこで、毎日道路に立って、運転手や歩行者に向けて信号などの交通ルールを守るように呼び掛ける活動を行いました。最初は「何しているの?」と不思議そうに

通り過ぎていった人たちが、毎日続けていると徐々に信号を守ってくれるようになり、周りの人たちにまで信号を守るよう声をかけてくれるようになりました。

　また、現地の警察官と一緒に、小学校を巡回して交通安全教室を精力的に行うと「子どもの頃からの交通指導が大切」と活動をサポートしてくれる先生が徐々に増えていきました。

新型コロナウイルス感染拡大で、帰国を余儀なくされた時はどのようなお気持ちでしたか?

▶これからもっとたくさんの小学校を巡回しようという目標を掲げた矢先に、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により日本へ帰国することとなりました。

　当時はネパールよりも日本の感染状況の方が深刻で、「気をつけてね」と声をかけてもらいました。すぐにネパールに戻れると思っていたため「すぐ帰ってくるね」と軽くお別れをしました。

帰国されてから、どう過ごされていましたか?

▶帰国後は、協力隊の派遣前訓練で過ごした駒ヶ根の地に移り住み、中学生に向けてネパールでの体験談を話したり、ネパールへの協力隊派遣50周年記念のイベント運営などに携わりました。駒ヶ根は、地域の方々との活動を通して視野を広げてもらった場所、そしてあたたかい出会いに恵まれた、第2のふるさとのような場所です。

今後は新たな道へ進まれるそうですね。

▶ネパールで活動する中で「住民の安全を守る仕事を続けたい」という思いが強くなっていきました。ネパールでの活動、現地の人たちからかけてもらった言葉は自分自身の糧になっています。帰国後、また日本で警察官として働こうと決意しました。その思いをネパールの同僚や友人に伝え、「もう一緒に働けないけれど、同じ警察官として頑張ろう。必ずネパールで会おうね」と約束しました。

　4月から地元の神奈川県で警察官として勤務します。ネパールでの1年間、帰国後の駒ヶ根での日々で学び得た貴重な経験を胸に、新たな気持ちで頑張ります。そして、協力隊の任期は終わっても、ネパールの人達とのつながりはこれからも続いていくものだと思っています。(お世話になった方々への感謝を力に、)日本、ネパール、ふたつの国の安全に力を尽くしていきたいと思います。

白上裕樹さん　駒ヶ根市出身　2018年度3次隊　ネパール派遣　土木

なぜ青年海外協力隊に参加されたのですか?

▶今まで専門としてきた土木での経験を生かして、日本で行っていた仕事とは別のことをしてみたかったからです。また、大学生の時インドに行ってから海外に興味を持ち、異なる文化や習慣を持つ人々と一緒に暮らしてみたいと思っていたからです。

現地では、どのような活動をしていましたか?

▶私の任地であるサンカプルは首都から15キロほど離れたところにあり、5年前の震災で大きな被害を受けた街でした。現地では、ネパール大地震のあと、日本の支援で建設基準が設定されて、その基準に沿って建物が施工されていました。震災復興のまちづくりのため、市役所で、現地エンジニアとともに家や公共構造物図面の作成、現場の施工管理・安全管理のアドバイス、作業補助などをしてきました。

活動をする上で苦労したこと、嬉しかったことはありますか?

▶この町では協力隊員の受け入れが初めてだったこともあり、最初は何をしたらいいのか分からず、ずっと模索していました。また、ネパール語以外にネワール語が頻繁に使われていたのですが、その言葉は最後まで理解できませんでした。私が地震で崩れた建物の調査をして、調査結果を一緒に活動している同僚が発表した時、「白上さんが考えてくれたことだ」と言ってくれた時は嬉しかったですね。

新型コロナウイルス感染拡大で、帰国を余儀なくされた時はどのようなお気持ちでしたか?

▶当時は、ネパールでの感染者も少なく、現地はいつもと

「学び舎」で、稲の脱穀作業

変わらない様子でした。帰国を余儀なくされましたが、数ヶ月したら事態が収束して、またネパールで活動できると思っていました。

帰国されてから、どう過ごされていましたか?

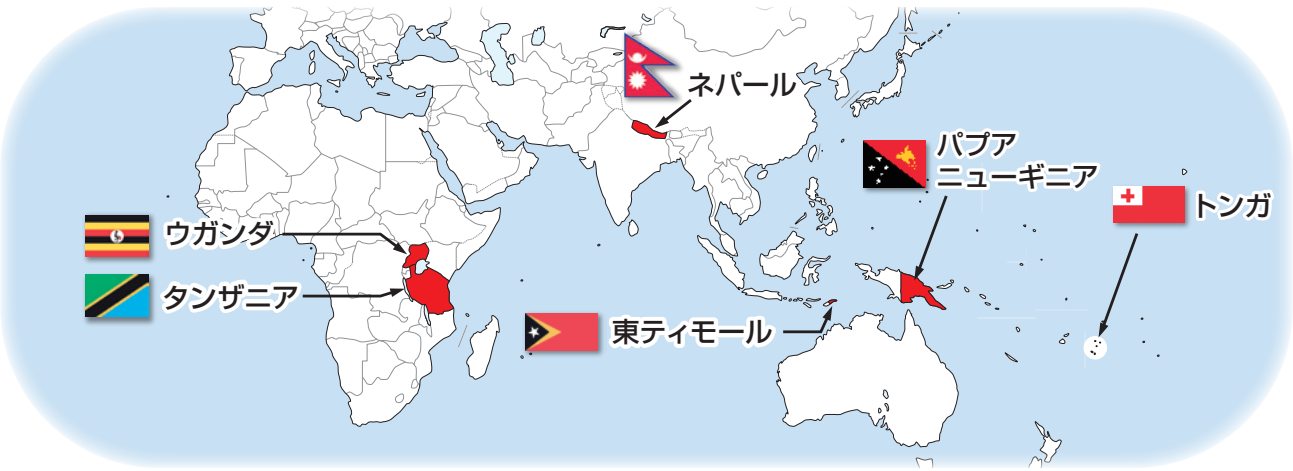
▶駒ヶ根に住んでいるので、訓練所や協力隊の仲間から誘ってもらい、派遣前訓練の地域実践プログラムでお世話になった「学び舎」にスタッフとして参加したり、地元中学生への出前講座・オンライン交流や在住外国人のための日本語教室に参加した他、ネパール交流市民の会の活動、在住外国人向けのコロナ相談会、みなこいワールドフェスタ、ネパール協力隊50周年のパネル展など、駒ヶ根市ならではの多くの活動に参加しました。

帰国後、多くの活動をされたようですが、一番印象に残っている活動はなんですか。

▶引きこもりの人たちの支援をしている「学び舎」によく足を運んでいたので、そこでの職業体験や大根作りが印象に残っています。スタッフとして参加しましたが、むしろ参加者のような経験ができました。

これからやっていきたいことなどはありますか?

▶協力隊の任期は終わってしまいましたが、地元の駒ヶ根市で働きながらJICA関連事業や出前講座に参加しつつ、隊員経験を社会に還元できるような活動をしていきたいと思っています。



原口風花さん

下條村出身　2019年度1次隊　トンガ派遣　美術

トンガ隊員たちによる絵本が完成！

広報紙の2020年秋号65号でご紹介したトンガの絵本製作プロジェクトがついに完成しました。

7月に駒ヶ根訓練所に集まって、絵本のコンセプトや内容を話し合い、それぞれの分担する絵やページを決めて製作に取り掛かってから半年余りにわたる努力が実りました。

絵本製作の中で、多くのさし絵を担当した、原口風花さんに、お話をお聞きしました。

なぜ青年海外協力隊に参加されたのですか？

▶子供のころに途上国を旅行し、途上国に魅力を感じていて、大人になったら仕事をもって、途上国に暮らしてみたいと思っていました。絵を描くことが好きだったので、美術に関わりながら途上国に暮らすことを探したら、協力隊に行き着きました。大学のころに協力隊を知りましたが、まずは教師経験を積んでから挑戦しようと美術教師になりました。

現地では、どのような活動をしていましたか？

▶トンガで最古の中高一貫の男子校のインターナショナル科で美術と日本語を教えていました。美術を勉強するのが初めての生徒たちに、まずは道具や絵具の使い方から教えました。好奇心が強い生徒さんたちで楽しく美術や日本語を学んでいたようです。

新型コロナウイルス感染拡大で、帰国を余儀なくされた時はどのようなお気持ちでしたか？

▶当時、なんとなく新型コロナウイルスのうわさを聞いていましたが、まだ実感はなかったです。
最初は2,3か月で帰れると思っていて、学校の生徒たちにも、すぐに戻ってくると言って学校を離れました。活動もそれなりになってこれからどうしていこうかと思っていた矢先の帰国で、仕事が中途半端な状態で帰ることに申し訳なく、不完全燃焼の気持ちで、とても残念でした。

絵具の指導をする原口さん

完成したトンガの絵本

帰国されてから、どう過ごされていましたか？

▶駒ヶ根にご縁があり、駒ヶ根市役所に依頼され「駒ヶ根デートマップ」を作ったり、駒ヶ根市や伊那市の学校で協力隊の体験を話す出前講座などをしていました。日本でもやることがあってありがたかったです。現職教員参加制度で参加していたので、10月から元の職場の学校に復職しました。

絵本を作ってみてどんな感想をお持ちですか？

▶私は、もともと油絵をやっていましたが、今回の絵本はデジタルで書いたので、勉強になりました。絵本が出来上がった時は、本当に感動しました。

出来上がった絵本はどのように活用していきますか？

▶トンガには、英語版の絵本を送るのですが、現地の各校に1冊しか送れないので、校長先生にまず見てもらって、ゆくゆくは子供たちにも知ってほしいです。トンガはSDGsの目標を達成している点も多いので、トンガの良いところは残し、悪いところは改善してほしいです。この絵本で取り上げていることを、トンガでどう広げるかがこれからの課題ですね。

日本語版は、日本の離島の学校にも送る予定です。日本の子供たちに同じ島国のトンガのことやSDGsのことを知ってもらうきっかけになればいいと思います。

木島史暁さん　中野市出身　2018年度２次隊　ウガンダ派遣　食用作物・稲作栽培

なぜ青年海外協力隊に参加されたのですか？

▶大学の授業で発展途上国のことを勉強した時に、どんなに優秀でも家庭や環境のせいで自分の進路や未来が選べない人が多いという現状を知り、日本に生まれたというだけで、ある程度進路を自由に選べる自分の現状との差に、違和感を覚えました。途上国に対して何か出来ればと思い、協力隊に応募しました。

現地では、どのような活動をしていましたか？また活動をする上で苦労したことなどありましたか？

▶現地では、主に稲の研究や稲作農家回り、ワークショップの開催や稲作振興ボランティアのサポートをしました。年齢差のあるカウンターパート（一緒に活動する現地の人）との付き合い方に悩みました。当初、相手の小さなミスや当たり前のことができないことに突っかかっていました。しばらくしてから、気がかりなことがあっても指摘せずに、自分の行動している姿勢から学んでもらうように心掛けたことで、関係性も良くなり、相手のミスも減りました。

ウガンダの稲作事情はどのような感じですか？

▶日本の江戸時代の稲作と似ています。農業機械が入れないため、田おこしから田植え、雑草取り、収穫を全て手作業で行いました。飢餓貧困削減を目的とした乾燥地帯の畑でも作ることができるネリカ米というものがあります。日本人が開発したもので、アフリカの多くの地域で作られています。

稲の試験で調査をしている写真

新型コロナウイルス感染拡大で、帰国を余儀なくされた時はどのようなお気持ちでしたか？

▶派遣されてからちょうど1年が経ち、活動が軌道に乗り出した直後に帰国を通達されたので、悔しい思いが強く、やるせない気持ちでいっぱいでした。

　その頃現地では、アジア人への差別があり、キャッサバ（芋）を投げられたり、罵声を浴びさせられたりしました。私たちの帰国後すぐに、ウガンダ政府は国境を封鎖するという、迅速な対策を取りました。

帰国されてから、どう過ごされていましたか？

▶帰国後、1か月間は何もせずに家でゆっくり過ごしていましたが、現地で病気になった時に「死ぬときに後悔しない様、日々努力する」と決意したことを思いだし、気持ちを切り替えました。

　まずは家業を手伝い、その後知り合いの稲作農家で5月から11月までアルバイトをしました。その農家は、個人宛にお米を送る際には必ず手紙を送っていました。その姿を見て、真心や気配りも仕事をする上で大切だと学びました。

　国際協力分野での活動が中途半端に終わったという悔いがあり、2021年1月から国際協力推進員としてJICA長野デスクに着任しました。

最後に協力隊に参加して、木島さんが得たことはなんですか？

▶現地で病気になって死を感じた時に、自分のビジョンである「死ぬときに後悔したくない」という人生のコンパスができたことです。

地方稲作農家に対してワークショップを行っている写真。ここでは水稲の播種から収穫までをポスターで説明し、この後実際に畑に入りトレーニングを行いました。

推進員の様子

駒ヶ根訓練所をバーチャルツアーで体験してみよう！

「JICA 海外協力隊の派遣前訓練ってなに? 訓練所ってどんなところ? 何をしているの?」そんな疑問を持ったあなた、是非一度バーチャルツアーで、訓練所をのぞいてみてください!

駒ヶ根訓練所の施設や訓練の様子を紹介しながら、実際に駒ヶ根訓練所に足を運んでいるような動画です。

駒ヶ根訓練所のバーチャルツアーは、YouTubeのJICA青年海外協力隊事務局チャンネルでご覧いただけます。なお、訓練の映像は2019年までに撮影したものです。

バーチャルツアー
QRコード

この動画は、協力隊のOBである笹瀬正樹さん（2014年度3次隊 パプアニューギニア 小学校教育）が撮影・編集をしてくださいました。笹瀬さんは現在タンザニアのアルーシャ州にある、さくら女子中学校の駐在スタッフですが、コロナ禍で日本に帰国中。笹瀬さんに少しお話を伺ってみました。

なぜ青年海外協力隊に参加されたのですか?

▶学生時代に、国際協力の教育分野への可能性に興味を持ったのがきっかけでした。また、海外の異文化の中に身を置いて生活や活動をすることで、私自身も成長することができると思い、自分へ期待も持って参加をしました。

新型コロナウイルス感染症拡大で、帰国を余儀なくされた時は、どのようなお気持ちでしたか?

▶とても悔しい思いでした。現地業務を担っているJICA草の根技術協力のプロジェクトが「いよいよ終盤!」というところで、配属先の学校も臨時休校となってしまいました。学校再開後も私は現地に戻れず、リモートでの業務に不安でいっぱいでしたが、タンザニアの同僚の前向きな姿勢に救われ、着実に前に進むことができています。

駒ヶ根訓練所のバーチャルツアーを制作した感想をいただけますか?

▶「協力隊を目指す人の不安が少しでも取り除けるように」「派遣前訓練にワクワクできるように」、そのような思いで制作に取り掛かりました。制作中は当時を振り返り、懐かしさを感じながら、楽しく撮影や編集を行いました。

私の人生を変えてくれた協力隊はこの場所から始まり、たくさんの経験や出会いを通じて、大きく成長することができました。こうしてJICAや駒ヶ根訓練所に恩返しができたことを、とても嬉しく思います。

笹瀬さん、ありがとうございました!

JICA 海外協力隊派遣前訓練再開のお知らせ

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、JICA海外協力隊員は昨年3～4月に全員が帰国し、2020年度の隊員募集や派遣前訓練は休止となりました。その後、一部の国を対象として昨年11月から隊員の派遣再開を進めており、これに伴って派遣前訓練も2021年度4月から再開することといたしました。訓練再開にあたっては、以下の対策により感染予防に万全を期し、新型コロナウイルス感染症の状況に応じて適切に対応します。

- 人数を定員の半分以下に減らす（2021年度1次隊は42名を予定）
- 合宿日数を従来の70日間から45日間に減らす
- 入所前2週間はホテルに滞在してリモート型訓練／健康観察の徹底
- 訓練生およびスタッフのPCR検査の定期的実施
- 感染予防行動の徹底

発行 独立行政法人 国際協力機構
駒ヶ根青年海外協力隊訓練所
〒399-4117 長野県駒ヶ根市赤穂15
TEL.0265-82-6151㈹ FAX.0265-82-5336
E-mail jicakjv@jica.go.jp
https://www.jica.go.jp/komagane/index.html

JICA駒ヶ根 facebook ページを開設!
https://www.facebook.com/jicakomagane

JICA駒ヶ根 メールマガジン
配信希望の方は jicakjv@jica.go.jp までメールでご連絡ください!

JICA駒ヶ根では毎月1回メールマガジンを配信しています。県内の国際協力に関する動きやイベントなど、耳よりな情報をリアルタイムでお届けします。

古紙パルプ配合率100%の再生マットコート紙を使用しています。 R100